

大分県における生シイタケ生産の現状と当面の対策

大分県きのこ研究指導センター 小関 明生

1. はじめに

乾シイタケの主産地である大分県の生シイタケの生産量は、昭和62年が2,141トンで全国第12位の生産県となっている。生シイタケの周年栽培技術が導入され、普及したのは昭和50年代であり、栽培の歴史は浅く、解決すべき点が多くあるので生産の現状と当面の対策について検討を行った。

2. 生産量の動向

大分県の生産量は表-1に示すように、昭和55年には1,160トンに増加したが、58年・59年と減少に転じた。その後60年から回復し、62年には2,141トンとなり、53年比で3.2倍の伸びを示している（全国的には53年比で1.1倍とその伸びはわずかである）。本県が生産量が増加した理由としては、乾シイタケ価格の長期低迷に加え、生シイタケ生産は資金の回転が早いこと、また、乾シイタケより手軽に料理できることなどから近隣都市での消費の増加が影響しているものと考えられる。

一方全国的には横バイ状態に推移しているが、これは他の生食きのこの競合が大きな理由と考えられる。今後生シイタケの消費拡大を図るためには自然食品としての宣伝や新しい料理法の開発などにも力を入れることが必要である。

3. 地域別生産状況

県内53市町村で生シイタケの栽培が行われており、このうち21地域で生シイタケ生産組合が設立されている。主産地は、九重町・玖珠町・天瀬町・本耶馬溪町であるが、この4町で県内生産量の63%を占めている。生産組合のなかの10グループの年齢別構成をみると表-2のとおりである。2~3のグループでは後継者が生産に携わっているが、全体的には50才以上が55%と高年齢層の比率が高くなっている。

生シイタケ栽培は重労働であり、高年齢になると規

模の縮小や生産を取りやめざるをえなくなる。労力の軽減のためには、基盤の整備や機械の導入が考えられるが後継者がいないと思いついた投資ができない。後継者対策は非常にむずかしい問題であるが、生シイタケ生産から考えると労力を軽減し、1本の原木を有効に使い、いかに高い収益を上げるかが残された課題だといえよう。

4. 規模別の生産状況

62年の規模別生産戸数は、ほだ木所有3,000本未満の小規模が171戸（37%）、3,000本から10,000本未満の規模が221戸（48%）、10,000本以上の大規模が72戸（15%）で小・中規模生産者が85%と大部分を占め生産基盤は脆弱である。それでも生シイタケ栽培は農林家の複合経営作目として組み込まれ重要な役割を担っている。従って経営調査などを実施し、それぞれの農家の実態にあった適正規模での生産指導が必要である。

5. 原木の確保

生シイタケ用原木伏込み量は表-3のとおりである。樹種別内訳をみると、コナラ47%、クヌギ52%その他1%である。これを全国と比較すると大分県の場合クヌギが多く使用されていることがわかる。

コナラ原木の多くは、岩手県・福島県などから原木業者や農協などを通じて移入されている。移入原木は伐採時期の不明なものが多く、乾燥が過ぎたものや、生木で種菌接種後萌芽するものなどが混在し、水分条件の異なった原木が多い。また、径級のふぞろい、樹齢が古く心材率の高いもの、樹皮の厚いものも移入されている。このように移入原木は形質的にいくつかの問題をかかえていることから、今後は供給量の減少なども考えられる。生シイタケ栽培を継続していくためには、原木の安定確保が重要であるが、そのためには自家原木林の造成と平行して早期に成林させるための肥培管理の推進も必要である。

6. 栽培技術

(1) 種菌の選定

数社の種菌メーカーの他品種が組み合わせられ、県内では約30品種が使用されている。産地として安定するためには使用品種を固定する必要があるが、栽培歴が浅く現在模索の段階である。市販品種の特性の研究と現地適応試験を実施し、地域に適合した品種を選抜、固定していかなければならない。また、これからは消費者ニーズに対応できる品種の開発も必要である。

(2) 伏込み

伏込み場所は個人の土地の所有状況などにより、スギ林、クヌギ林、人工ほだ場、休耕田など様々であり、これらの伏込み地は当然気象条件が異なるので、それぞれの場所にあった伏込みや管理方法を明らかにするとともに適切な管理指導を行う必要がある。

(3) 発 茸

季節のつなぎ目に、新規のほだ木が不足している場合が多くみられ生産が安定していない。完熟していないほだ木を無理に使用するため発生量が少なく、その後の発生も悪いようである。従って早期ほだ化技術の開発が必要である。

7. 集荷販売

62年の集荷販売をみると、農協系統が74%、生産組合が17%、個人出荷が9%となっている。

出荷先は、福岡県内市場40%、地元市場36%、広島市場8%、東京市場7%、その他となっている。

荷姿はパック詰が大部分であるが、1kg入りなどの箱詰もある。ある産地での選別規格をみると、露地もの、ハウスもの、品質、傘の大きさによって54通りにも分けている。

大分市場の入荷量をみると不安定となっており、安定出荷が望まれる。今後は各市場での動向を把握し、市場対応を検討しなければならない。

8. おわりに

大分県の1997年の目標生産量は3,050トンと計画されている。この目標を達成するためには、今まで述べてきた課題を解決しなければならない。とくに県内で多く使用されているクヌギ原木による栽培技術の確立を図り、生産指導の強化が望まれる。

表-1 大分県と全国の生シイタケ生産量の推移

年次	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62
生産量	666ト	816	1,162	1,325	1,312	1,022	1,104	1,458	1,849	2,141
(伸率)	(100)	(123)	(174)	(199)	(197)	(153)	(166)	(219)	(278)	(321)
全 国	71,910	77,517	79,855	78,365	75,777	74,680	73,921	74,706	77,952	80,940
(伸率)	(100)	(108)	(111)	(109)	(105)	(104)	(103)	(104)	(108)	(113)

表-2 生シイタケ生産グループの年代別構成表

年 代	50才以上	40才代	30才代	20才代	10才代	計
Aグループ	53	3	4			60
B "	26	5				31
C "	11	3	2	1		17
D "	3	3	3			9
E "	1	3	6	7		17
F "	11	4				15
G "	4	7	6	2		19
H "	6	5	6			17
I "	4	9	18	7		38
J "	19	2	5	1		27
計	138	44	50	18	0	250

表-3 大分県の生シイタケ用原木伏込み量の推移

年次	区分			計
	な	ら	く	
58年	6,359	7,218	286	13,863
59年	9,408	6,305	97	15,810
60年	10,591	11,813	77	22,481
61年	9,209	11,105	107	20,421
62年	9,504	13,386	55	22,945
平均	9,014	9,965	124	19,103

引用文献

- (1) 林野庁林産課特用林産対策室：昭和62年特用林産関係資料，1988年
- (2) 大分県特用林産振興協議会資料，昭和63年度